学生のアイデア・「学び」の成果

「禅寺丸柿まつりの企画・運営」に参加

▲ 左から高嶋さん、高橋さん、佐藤宏美さん（経済3）

小田急線柿生駅前の柿生中央商店会からの課題「禅寺丸柿まつりの企画・運営」に取り組んだのは、金田春菜さん（商3）を代表とする6人。

子ども向け人形劇が好評
意思疎通の大切さ実感

6月から商店会の方との打ち合わせを重ね、10月16日のまつり当日には子どもたちを対象とした輪投げなどのミニゲーム、クイズ大会、種飛ばしなどの企画が、「柿丸くんとお姫様」と題した人形劇。07年の同インターンシップで選定された商店会のイメージキャラクター「柿丸くん」を主人公に、高橋風香さん（文3）、高嶋愛歌さん（文2）が中心となって作成したオリジナル劇で、多くの子どもたちが熱心に見入っていた。

金田さんは「無事に終わってホッとしています。事前準備と、メンバー間の意思疎通の大切さを実感しました。多くの子どもたちが参加してくれて、私たちも一緒になって楽しむことができました」と話した。

梶が谷駅「エルカジまつり」に参加

▲ 参加したメンバーたち（中央、赤い服を羽織っているのが稲葉さん）

▶ 子どもたちに好評だったスーパーボールすくい

ゲーム企画、ライブも
特技生かし盛り上げる

10月23日、東急田園都市線の梶が谷駅周辺で行われた「エルカジまつり」（梶が谷駅前通り振興会主催）には稲葉久美子さん（商2）ら17人が参加し、祭りを盛り上げた。

ライブステージが行われたメーン会場の司会や、スーパーボールすくいなどのゲーム企画を担当。メンバーの12人が所属する軽音サークル「New Generation」がライブステージに出演したほか、調理師免許を持つ劉匠さん（経営2）が考案したオリジナルメニュー「エルカジおやき」を模擬店で販売するなど、各自の特技を生かした。

また、当日は20人の学生ボランティアも参加し、運営に貢献した。

稲葉さんは「無事に終わり、大きな充実感があります。みんなで考え、意見を交わしたことが、成功につながったのだと思います」と話した。

銀柳街「秋祭り」の企画立案

▶ 左から大西さん、古橋さん、宮本さん

▶ イベントに合わせ、アンケート調査を実施

商学部・石川和男ゼミ3年次の古橋直樹さん、宮本涼太さんは川崎駅東口にある商店街・銀柳街の活性化に取り組み、10月9、15、16日の「秋祭り」に合わせた企画を立案した。

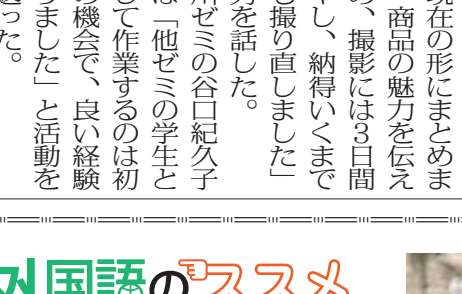
川崎市立商業高校の生徒のアイデアを活用し、祭りの情報を分かりやすく配置した「ラッピングバス」を運行（10月1～31日）。祭り当日はラッピングバスのコラボイベントとして、写メとカレンダーの交換や、ぬり絵ブースを設置。また、アンケート調査を実施し、現在は結果をまとめている。

ラッピングバスを運行
学んだこと生かす機会に

「企画を考えるのは大変でしたが、学んだことを生かす、貴重な機会となりました」（古橋さん）、「予測どおりにいかないことばかりで、そこからどうするかが大切だと感じました」（大西さん）、「客層を調査することの重要性が分かりました」（宮本さん）と話した。

ユニバーサルファッションの普及戦略を提案

▶ アソシエCHACOの担当者と学生たち



▲ 完成したカタログの１ページ

商学部の石川和男・国田清志両ゼミの3年次生らの課題に対し、学生たち10人は「ユニバーサルファッション（機能性おしゃれ介護服）」の普及を目指し、活動した。

向ヶ丘遊園駅北口アトラスタワー2FにあるアソシエCHACOからの課題に対し、学生たちは商品カタログの作成を提案。自分たちでモデルを務め、撮影・編集作業も自ら行い、A5判・10ページのカタログを作り上げた。現在は年内の完成を目指し、最後の調整を行っている。

〝商品カタログ〟を作成
2ゼミで協力、撮影・編集も

国田ゼミの清水裕介さんは「情報を詰め込みすぎて見づらかったものを、アドバイスを参考に、現在の形にまとめました。商品の魅力を伝えるため、撮影には3日間を費やし、納得いくまで何度も撮り直しました」と苦労を話した。

石川ゼミの谷口紀久子さんは「他ゼミの学生と協力して作業するのは初めての機会で、良い経験になりました」と活動を振り返った。

▲ 「『藤子・F・不二雄ミュージアム』に関するプレイベントの企画・運営」（多摩区役所）。ポスターを用い、活動内容を報告

▲ 「環境樹脂の強みを生かした地球にやさしい商品のマーケティング」（㈱ユニオン産業）。実際の商品も展示し、来場者に説明

課題解決型インターンシップ
20チームが参加 成果発表会

キャリアデザインセンター「課題解決型インターンシップ」の成果発表会が11月6日、生田キャンパスで開催された。各企業・NPO法人などからの課題に取り組んできた20チームが活動内容と成果をポスター展示し、来場者からの質問に応じた。

▲ 「長沢商店街コミュニティースペースでのイベント企画・運営」（長沢まちづくり協議会）。笑顔で質問に応じる

▲ 「『多摩川夕涼みコンサート』の企画・運営」（NPO法人多摩川エコミュージアム）。マスコットキャラクターを生かしたグッズを展示

外国語のススメ LL研究室 −●3●−

◀ 上野の猿

英語　drop out について

高橋　勇夫　法学部教授

上野動物園で猿を見ていると、他の猿たちとあまり交わらず、すねて仲間に背を向けている猿がいる。ときどき小猿がじゃれてきても歯を剥いて追い返す。大人げないことこの上ない。しかしじっと佇む彼の背中には、意地と悲哀が交々（こもごも）に漂っている。ドロップアウトした猿だ。仲間の猿たちは彼を避けて通る。さぞかし付きあいの悪い、イヤなやつなのに違いない。

アップルのスティーヴ・ジョブズが2005年にスタンフォード大学の卒業式で行った有名なスピーチは、ドロップアウト drop out の話から始まる。養父母がコツコツ蓄えた貯金が、大学の学費の支払いであっという間に底をつくのにいたたまれなくなって、ジョブズは半年かそこらで中退してしまう。けっきょく彼は高等教育を受けないままに終わるのだが、それでも自分の成功は「降りる drop out」ことから始まったのだと言って憚（はばか）らない。「真正」なものは「降りる」ことによってしか手に入らない、彼はそう考えた。しかも彼は、後年、それをTHINK DIFFERENTと、何ともスマートに言い換えている。

上野のはぐれ猿と御同様、スティーヴ・ジョブズがいいやつだったという話は寡聞にして知らない。たぶん上野の猿は「いいやつ」でいることがイヤになったのだ。ジョブズは Stay Hungry, Stay Foolish. というスローガンでスピーチを締めくくっている。もちろん、このようなスローガンを信奉する男が「いいやつ」であったはずはない。

※全文はＬＬ研究室ホームページをご覧ください。